

第二部会体育研究部

成田市立本城小学校 鈴木 陽介

富里市立根本名小学校 宮崎 大楓

1 研究主題

スポーツとの多様な関わり方に着目した体育科学習の在り方
～高学年 バasketボール 創作メインゲームを通して～

2 主題設定の理由

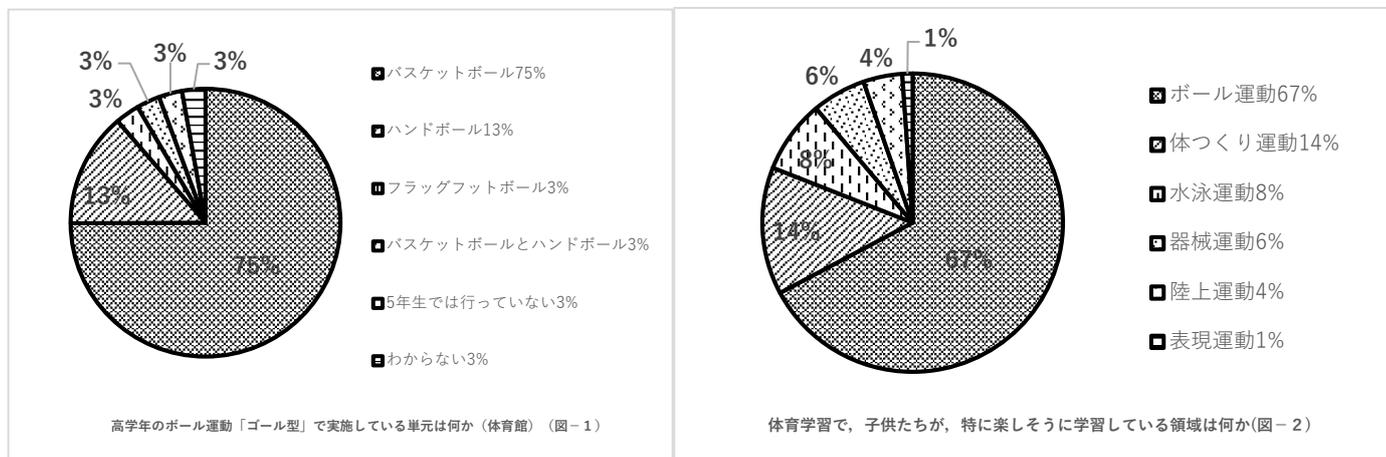
(1) 学習指導要領から

2017年に告示された小学校／中学校学習指導要領解説体育編／保健体育編において、「子供たちが、学習した内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、体育科においても、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進することが大切である。」とある。また、「運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。」とある。子供たち同士の関わり合いの中での気づきを促し、必要な知識及び技能の習得を図るため、学びに必要な指導の在り方を追究し、必要な学習環境を積極的に設定していくことが求められている。

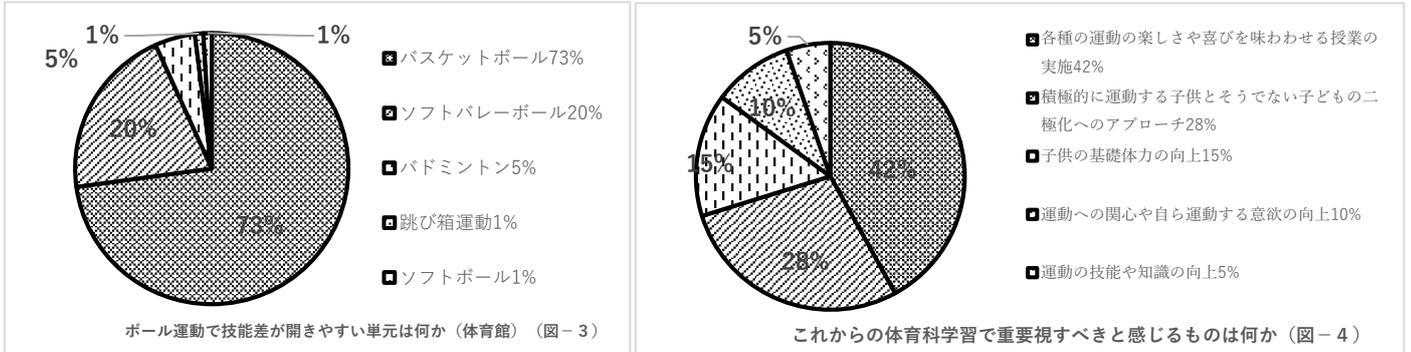
(2) 教職員の調査から

令和6年度、成田市・富里市・栄町の体育主任33名を対象に、体育学習に関するアンケートを行った。「高学年のボール運動『ゴール型』で実施している単元（体育館）は何か」という問いに対し、Basketボールが75%と最も多く回答された。二部会全体で、体育館体育でのBasketボールを題材にした学習が組まれていることがわかった（図-1）。

また、高学年担任及び、高学年担任経験のある教職員207名を対象にした体育学習に関するアンケートも行った。「体育学習で、子供たちが、特に楽しそうに学習している領域は何か」という問いに対し、ボール運動が67%と最も多かった（図-2）。



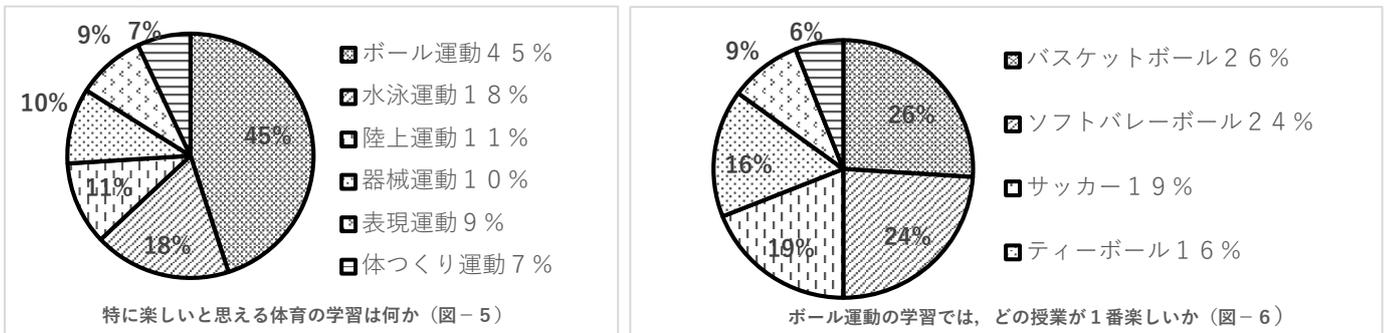
「ボール運動で技能差が開きやすい単元（体育館）は何か」という問いに対し、バスケットボールが73%と突出して多く回答された（図-3）。子供たちが特に楽しく活動している領域としてボール運動が最も多く回答されている一方、技能差が開きやすいと感じている教職員が多いことがわかる。「これからの体育科学習で重要視すべきと感じるものは何か」という問いに対し、「各種の運動の楽しさや喜びを味わえる授業の実施」が42%と多かった。一方、「積極的に運動する子供とそうでない子どもの二極化へのアプローチ」は、28%であった（図-4）。



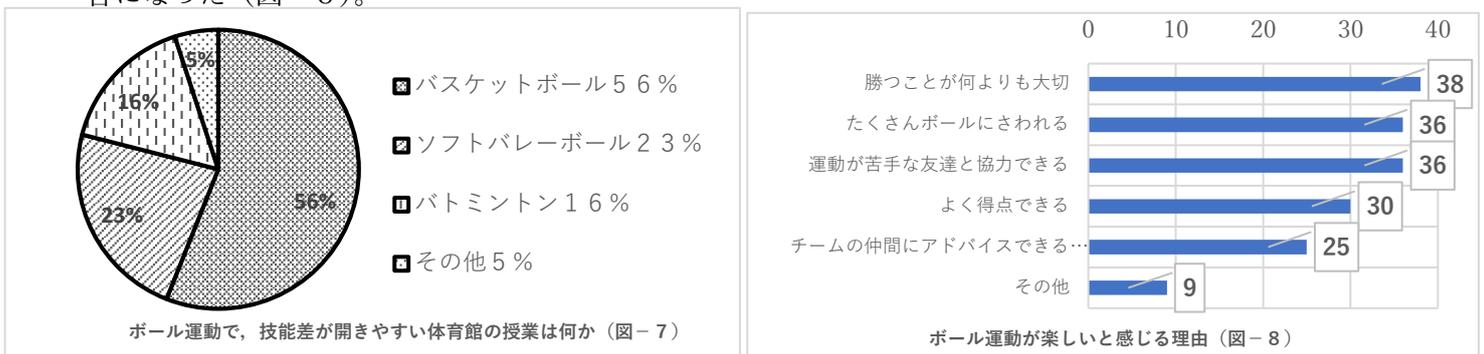
(3) 児童の意識調査から

令和6年度、成田市・富里市・栄町の小学校5・6年児童2,611名を対象とし、ボール運動に対する意識調査を行った。

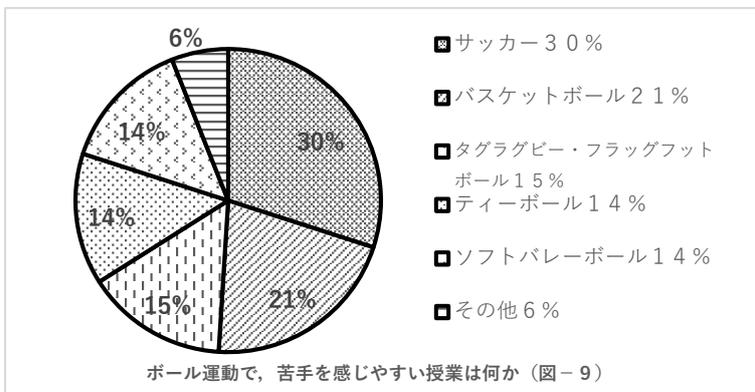
教職員のアンケート同様、「特に楽しいと思える体育の学習は何か」という問いに対して、45%が、ボール運動と回答した（図-5）。また、「ボール運動の学習（チームでの対戦）では、どの学習が最も楽しいか」という問いに対しても、26%の児童が、バスケットボールと回答し、割合は最も多かった（図-6）。



「ボール運動で、運動が上手な人と苦手な人が分かれやすい体育館での体育の授業は何か」という問いに対して、56%の児童がバスケットボールと最も多く回答した（図-7）。児童は、バスケットボールに対して、肯定的に捉えている一方、技能差が開きやすい運動と感じ取っていることがわかった。また、「ボール運動の学習（チームでの対戦）で、楽しいと感じる理由は何か」については、「勝つことが何よりも大切」、「たくさんボールにさわられるから」、「運動が苦手な友達と協力できるから」が40%弱の回答になった（図-8）。



また、「ボール運動の学習（チームでの対戦）では、どの授業が苦手と感じやすいか」という問いに対して、体育館体育の単元でみると、バスケットボールと回答した児童が最も多かった（図－9）。また、「苦手と感じる理由」として、「なかなか得点できない」が61%、「あまりボールにさわることができない」が31%、「負けると文句を言われる」が15%であった（図－10）。



(4) まとめ

「(1) 学習指導要領から」では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導方法を工夫し、授業改善をすることで、3つのコンピテンシーをバランスよく育成することが必要だと考えた。体育科学習を通して、スポーツとの多様な関わり合いの中での気づきを促し、課題を見付け、その解決に向けた学びの在り方を追究していくことが求められている。「スポーツの多様な関わり方」には、「する、みる、支える」に加えて「知る」の視点が改訂から含まれるようになった。スポーツの決まりきったルールを「する」だけでなく、「みる、支える、知る」の視点を踏まえた授業構成をしていく必要があると考えた。

「(2) 教職員の調査から」では、二部会の大半の学校が、年間指導計画の体育館体育においてバスケットボールを設定している。子供たちが特に楽しく活動している領域として、ボール運動が最も多く回答されている一方、技能差が開きやすいと感じている教職員が多い。また、多くの教職員がこれからの体育科学習で、「各種の運動の楽しさや喜びを味わえる授業の実施」を重要視すべきと感じている。技能差が開きやすいからこそ、どの児童にもアプローチできる実践の工夫が必要とされるだろう。

「(3) 児童実態の意識調査から」では、教職員の調査同様、ボール運動に肯定的であり、体育館でのボール運動では、バスケットボールに意欲的である。しかし、その反面、バスケットボールを苦手と感じたり、技能差が開きやすいと感じていたりする点がある。また、ボール運動の楽しさに勝利至上主義が最も多い回答となり、接触球数や得点機会の多さも上位を占めた。これらのことから、バスケットボールは、技能差が開きやすい傾向にあり、運動が得意な児童とそうでない児童が生まれやすく、現状の課題になっている運動の二極化につながりやすいと考える。スポーツを教材にしている以上、勝利への追求は自然である。しかし、勝利への追求に偏ると、運動が得意な児童の活動量が増え、技能差は開く一方だろう。バスケットボールを「する」側面だけでなく「みる」「支える」「知る」といった多様なスポーツとの関わり方を意識した授業構成が必要だろうと考える。

以上のことから、第二部会体育研究部では、技能差が開きやすいバスケットボールを教材にし、スポーツの多様な関わり方に着目した授業の研究を進めるため、本主題を設定した。

3 研究仮説

仮説1【児童の変容】

個の動きを見る視点を明確にし、児童同士が関わり合う場を設定すれば、知識及び技能が向上するだろう。

- 兄弟チームを作成し、チェックマンが「できること」を「見つけて」ポイント化するゲームを通して、知識の向上を目指すとともに、感覚的な知識を基にした技能の定着を促す。
- 1サイクルごとにメインゲームの映像を振り返り、自分のできることを可視化するセルフチェックシートを用いることでメタ認知を促す。

仮説2【教職員の变容】

創作メインゲームや課題に重点を置いた授業モデルを構築すれば、みんなが運動の楽しさや喜びを味わえる授業を行うことができるだろう。

- ゴール型の学習で身につけさせたい児童の動きのすべてがポイントになる「オールポイントバスケットボール」を創作メインゲームとして設定し、決まりきったルールのスポーツをするというイメージとは、違う視点をもてるようにする。
- チームの特性に合った課題の提供や発問等の掲示、また、解決に向けて停滞しているチームへの声掛けをまとめた資料を用意することで、児童同士の支え合いを促す課題解決学習に取り組めるようにする。

4 研究計画

時期	研究内容
【令和6年度】 11～12月 2月 3月	○第1, 2, 3回学習会 ・提案者決め ・研究の方向性 ・研究主題の検討 ○第4回学習会 ・アンケート内容の検討 ○成田市・富里市・栄町小学校5, 6年生児童を対象にアンケートを実施 ○成田市・富里市・栄町小学校教職員対象にアンケートを実施
【令和7年度】 4月～7月 8月 9月～12月 1月～3月	○第5回学習会 ○資料作成 ・研究仮説の検討 ・理論研修 ・授業内容検討 ○紙上提案 ○第6回学習会 ○授業内容検討 ○授業研修 成田市21校・富里市7校・栄町4校 ・授業の実践 ・実践の反省 ・データ集約 ○研究のまとめ
【令和8年度】 4月～7月 8月	○提案資料作成 ○印旛地区教育研修会 本提案